永井 丈博

●平成23年度1次隊／派遣国：ガーナ共和国／職 種：理数科教師

大学生として臨んだアフリカでの化学教師 楽しく好奇心の湧く授業づくりに熱意

初めての海外 初めての日本人教師

パイロットになりたい。永井丈博さんは子どものころからの夢を抱きながら大学に通っていた。茨城大学理学部で宇宙の研究を専攻していたことも、パイロットになった時に役立つと感じたから。国際感覚を磨くことも必要と、留学を考えていた時、青年海外協力隊の理数科教師は経験や資格がなくても可能と知り、思い切って応募し合格。大学を休学して参加した。

赴任地はガーナ共和国。初めての海外だった。怖い気持ちもあったが、自分にムチを打って旅立った。アッパーウェスト州のカレオ村にある実業高校で化学を教えることが、与えられた任務だった。「屋根のある青空学校という感じでした。生徒は15歳以上で、私よりも年上の人もいたと思います。初対面の時は緊張しました。」と永井さん。自己紹介をすると初めての日本人ということもあり、生徒は大きな興味を抱いた。「津波は大丈夫だったのか?」と聞いてくる生徒もいれば、日本と中国の区別がついていない生徒もいた。国、人種、文化、宗教が違う人々に受け入れられたことに大きな喜びを感じたという。

授業を面白くしたい 理想を掲げて試行錯誤

ガーナの公用語は英語。実は永井さん、英語があまり得意ではなかった。大学のESS(English Speaking Society)サークルでは落ちこぼれだったと笑う。現地に行ってしまえば何とかなると楽天的に考えていた。当初はなまりの強い英語や現地のダガレ語に驚いたが、同僚や生徒の助けもあり、英語はすぐに上達した。

指導にあたっては「授業を面白くしたい」と理想を描いた。暑い地域のため、疲れから授業中に寝る生徒も多かった。また、教科書を持っていない生徒もいたため、「聞くだけで分かる授業・好奇心が湧く授業」を心掛けた。授業には化学実験を多く取り入れた。「粉塵(ふんじん)爆発」というヒット作も生まれた。小麦粉とロウソク、ストロー、ダンボールを使い、巻き上がった小麦粉に引火して爆発が起こるという実験で、手軽にできるよう、工夫してコンパクトな実験に仕上げた。この実験は他の隊員にも伝わり、各地で人気を集めたという。

「セロファンテープなど地元で手に入りにくい道具は使わず、ローカルマテリアルにこだわりながら、さまざまな実験教材を作りました。徹夜で作った実験教材を上司が誤って踏みつぶしてしまい、心が折れたこともありました。」

教材となる実験を増やそうと奮闘する日々。その姿に興味を示し、永井さんが考えた実験を授業に取り入れる同僚も現れた。「何よりも嬉しかった出来事」と永井さんは感慨深げに話す。

実験を通して心を通わせた同僚とは、日常生活でもよき友人となった。ニワトリにたくさん卵を産ませるにはどうしたらよいかなど、さまざまな相談も受けた。ドイツ人ボランティアとの交流も忘れられない思い出になったという。

1.理数科ワークショップでの出張授業「電磁力とは?」 2.給食はもちろん頭で運びます
3.愛すべき生徒との最後の一枚 4.授業後の質問タイム

頻繁に起こる停電や断水 不便さも楽しみに変える

困ったことは、断水や停電が頻繁に起こること。1日で復旧することもあれば、3カ月かかることもあった。2年間のうち半分は水道が使えない状態だった。暗闇で料理を作る時の炭の火花、夜空を彩る星空の美しさ…。不便さは、森羅万象を楽しむ時間にした。

ガーナでは指導者としての責任感を持って過ごした。「教育を受けられるのは恵まれた子どもたち。教育を受けることができない子どもの中には、外国人を見ると石を投げたり、暴言を吐く子もいました。その子を捕まえて親の元に連れて行き、間違ったことをしていると注意したこともありました。世界基準の常識を知って欲しかった。」と永井さんは振り返る。

地域のために働くのもいい 職業選択肢が広がる

大学生で協力隊を経験する人は決して多くない。復学後は大学を中心に協力隊での経験を伝えた。ボランティアについてはもちろん、人と関わることの素晴らしさ、グローバルな価値観を持つ事の大切さを知って欲しかったからだ。

パイロットへの道は開けなかった。しかし、「協力隊ではガーナの人にいろいろ助けられた。地域の人たちのために働く仕事もいい」という気持ちが芽生えていた。永井さんは水戸市が青年海外協力隊やボランティア経験者を対象に職員を募集する特別選抜枠制度を知り受験。難関を突破し、晴れて水戸市の職員となった。

「入庁した日に、『上司には若い人の意見やアイデアを受け入れるように言ってある。どんどん意見を言って欲しい』という市長の言葉はうれしかった。」と目を細める。現在は市民協働部文化交流課に所属する。取材時は平成29年2月17日～19日に開催される「エンジン01文化戦略会議」～オープンカレッジin水戸～の準備を進めていた。「エンジン01文化戦略会議」は、文化・芸術・スポーツなど、各分野の第一線で活躍する人々が、日本文化のさらなる深まりと広がりを目的に参集したボランティア集団で、オープンカレッジでは、県内各地で文化戦略会議の会員が地域の人々と交流する。筑西市出身のオペラ歌手・中丸三千繪さんを大会委員長、作曲家の三枝成彰さんを副委員長に据え、作詞家の秋元康さん、俳優で映画監督の奥田瑛二さん、作家の林真理子さんらが実行委員会委員に名を連ねており、永井さんも成功へ導くためのスタッフとして頑張っている。

「私の勤務する部署は、さまざまなイベントを持つ課です。青年海外協力隊をはじめとするボランティア経験者は実行力があると思います。水戸市役所で活躍できる人が増えるよう、特別選抜枠をPRしていきたい。」

力強く話す永井さんを見守る同僚の笑顔から、大きな期待が垣間見えた。

VOICE

職場の上司より

一緒に仕事をして2年目になりますが、コミュニケーション能力の高さ、行動力、意思の強さは特別なものを感じています。職場のムードメーカーとしても欠かせない存在です。「エンジン01文化戦略会議」などのイベントを進める部署ということもあり、著名な方々と打ち合わせや食事をする機会もあるのですが、そんな時にもひるむことなく、堂々としている姿には驚きます。性格もあるとは思いますが、青年海外協力隊で異文化に飛び込み、揉まれてきた経験が大きいのではないかと思っています。さまざまなイベントを抱えている部署ですので、持ち前のバイタリティーや協力隊での経験を存分に発揮し、イベントを成功に導いて欲しいと願っています。

水戸市市民協働部
文化交流課 係長
大森 明彦さん

山口　拓

●平成10年度3次隊／派遣国：ハンガリー　●平成15年度短期／派遣国：カンボジア王国／職 種：体育

経験を重ねて磨かれた交渉力という武器
発展途上国での国際貢献活動に活かし続ける

カンボジアの
スポーツ振興に貢献する

山口拓さん(筑波大学体育系助教)は現在、日本とカンボジアを行き来しながら、「スポーツを通じた国際開発」や「スポーツが各開発課題に果たす役割」などの研究に明け暮れる。

カンボジア五輪委員会のアドバイザーを務め、各種の提言を行うほか、NGOの技術顧問としてカンボジアの小中学校体育科支援をサポートするなど、カンボジアの体育・スポーツや社会の発展に向けた様々な活動に関わっている。また、外務省やスポーツ庁などが主導し、日本スポーツ振興センター(JSC)が運営するSPORT　FOR TOMORROW(SFT)事務局をサポートしつつ、JICAを通じて筑波大学の学生をカンボジアに派遣し、現地学生と共にスポーツを通じて地域の障がい者理解を高める教育活動なども行っている。

途上国と先進国の差
スポーツで埋められないか

陸上競技でタイムを削る日々を送っていた山口さんに転機が訪れたのは大学1年生の時だった。「ケガで練習ができなくなりました。このまま競技では歩んでいけないと感じ、当時、興味のあったビジネスに関与することを決めました。『ユースリーダーツアー』の企画を旅行社に持ち込み、実現しました。」と振り返る。卒業後は出版会社勤務を経て、子ども達の体育指導を行う人材派遣事業を起こすも、出会いがあって単身カナダへ。私立学校の体育教師を務めながら、地域の人々に生涯スポーツの指導を行うなど、文化や制度の違いを学ぶとともにコミュニケーション能力を磨いた。「実はカナダに行く前、青年海外協力隊に応募したのですが、落ちてしまったんです。」と話す山口さん。さまざまな経験を積むうちに「先進国と途上国では暮らしに違いがあるのではないか。もし、そうならスポーツで貢献できないか。」という思いが込み上げてきたという。途上国の人々のために、役立つ経験ができると考えたことが協力隊に応募した理由だった。

カナダに渡って1年が過ぎた平成10年3月、念願の協力隊への参加が決まった。派遣国はハンガリーのダバシュ市。職種は体育、配属先は公立高校だった。現地での授業は、生徒にボールを渡してサッカーやバスケットに講じる息抜きの時間になっていた。山口さんは準備運動を徹底し、テーマを与えてスポーツに取り組ませた。放課後には、拳法スクールを開講したり、地域クラブが主流のスポーツ大会に学校クラブが参加できるように交渉したりもした。体育の成績が不振な生徒に単位を与えるか否かで、校長と激論を交わしたこともあったという。

市のスポーツ振興策を
元五輪候補選手の市長に具申

ダバシュ市に派遣されたのは市長が交替したばかりの時だった。新市長は元五輪候補選手で市民スポーツの興隆に力を注ぐ方針を掲げていた。これを聞いた山口さんは心躍らせた。

1.スポーツ大会で入賞し報告を受ける　2.教育行政関係者と
3.スポーツ祭　4.日本の日で羽子板を紹介

大学では、恩師が専門とする「公共サービスのマーケティング」に出会い、スポーツにアクセスできない人々に戦略を講じて機会を増大させることなどを学んでいた。そこで、山口さんは、市民がスポーツに接する機会を増やすための企画案を練り、市長に届け続けた。熱意は伝わり、青少年スポーツ課が新設されることになった。

「ハンガリーでは知識不足に悩みました。行政サービスを向上させるには、まず、政策を知らなければならない。そう感じて、帰国後は政策を学ぶために大学院へ進みました。」

大学院で学ぶだけでは片手落ちになると、五輪メダリストの有森裕子氏が設立したNPO　ハート・オブ・ゴールド(HG)や世界オリンピアンズ協会(WOA)での活動も継続した。HGの活動ではカンボジアに派遣され、アンコールワット国際ハーフマラソンをサポートし、平成15年にはカンボジアのスポーツ事情に精通していたことから、青年海外協力隊員として2度目の派遣を経験した。

派遣中はスポーツ指導者育成の祭典などの運営に携わり、元なでしこJAPAN監督の佐々木則夫氏や他のオリンピアンとカンボジアの若手スポーツ指導者育成に取り組んだ。また、JICAのNGO技術者派遣制度で国連東ティモール暫定行政機構に派遣され、独立式典行事の副統括や国家開発計画の策定なども手掛けた。

助けに行くんじゃない
助けてもらうんだ

大学院卒業後は、HGのスタッフとして、単身カンボジア入りし、現地事務所の設置、スタッフの雇用、新規事業の調整などに取り組んだ。スポーツ指導者育成事業は、その後、JICA草の根パートナー事業の小学校保健体育科支援事業に発展し、JICA事業のプロジェクトマネジャーあるいは教育省総局長のアドバイザーとして従事した。国際チャリティーマラソンの現地化に見通しが立った平成24年秋、山口さんは帰国し、筑波大学・体育系の助教として後人の育成を開始した。

抜群の行動力と企画力でエネルギッシュに活動する山口さん。その礎は、何事にも明確なビジョンがないと先へ進めさせない父親、世界の不都合な事実を示し続けた母親によって磨かれたという。「高校進学にも理由を迫られたが、逆にビジョンさえ示せば、何にでも挑戦させてくれる家庭だった。」と振り返る。兄妹は海外在住と冒険家だというのも頷ける。

途上国の人々と日本人の違いを聞くと「途上国の人々は皆、心が豊かです。子どもから大人まで、人と人のつながりが深く、助け合って暮らしています。現代の日本人が失いつつある自信を持っています。今の日本はあまりにも合理化が進み、欧米スタイルが日本人の気質に合わなくなっているのかも知れません。世界的に見て、日本人の発想力と応用力は群を抜いていますので、是非、自信をもって能力を発揮してもらいたいですね。こうした思考に至れたのは、協力隊の経験があったからだと思っています。学生にも協力隊への参加を強く推奨しています。『助けに行くんじゃなくて、助けてもらいに行け』ってね。」

自身を高めたい一心で、次々に目標をクリアし続けた山口さん。途上国のスポーツ振興やスポーツを通じた課題解決を担う「高潔の志士」の今後の活躍が楽しみだ。

VOICE　職場の上司より

平成18年、JICA中国、ハートオブゴールド、筑波大学の提携による草の根技術協力事業で、カンボジアの「小学校保健体育学習指導要領」を策定することになり、現地でネゴシエーションができる人材として選ばれたのが彼でした。内戦で教育者が殺されてしまった中、限られた時間でゼロから作る任務でしたが、現地の信用を築きながら完成させ、カンボジアの教育人材も育っているという成功事例です。スポーツを通した開発支援というニーズが高まる中、それに関わる人材を確保するため、筑波大学は彼を招きました。筑波大学がJICAとリンクするために調整したのも彼です。スポーツは世界に貢献できる有効なツール。大学でも彼と考えを共有する仲間が増えています。

筑波大学
体育系 教授
岡出 美則さん

近藤　桂
平成18年度3次隊
派遣国：ボリビア多民族国
職　種：陶芸

井坂　佳一
平成20年度1次隊
派遣国：パナマ共和国
職　種：小学校教諭

塩畑　絵梨
平成22年度1次隊
派遣国：ブルキナファソ
職　種：小学校教諭

鈴木　聡志
平成22年度1次隊
派遣国：エチオピア連邦民主共和国
職　種：体育

深谷　結
平成22年度3次隊
派遣国：セネガル共和国
職　種：小学校教諭

星野　優輝
平成23年度2次隊
派遣国：ラオス人民民主共和国
職　種：バレーボール

桑野　利一
平成24年度1次隊
派遣国：スーダン共和国
職　種：電気･電子設備

大島　慧
平成24年度1次隊
派遣国：サモア独立国
職　種：理数科教師

茨城県青年海外協力隊を育てる会
会 長　**小川　一成**

昭和41年、私が大学へ入学した年に青年海外協力隊がスタートしました。当時私は新聞でその記事を見つけ是非参加したいと思いましたが、とてもハードルが高く私にとっては夢でした。
その翌年に1年間大学を休学してヒッチハイクで世界を旅し、行く先々で多くの方々にお世話になりました。この事が原点にあり今度はお返しをしたいという思いで「茨城県青年海外協力隊を育てる会」を20年前に設立いたしました。
日本の若者が途上国の国造りに現地の人と同じ目線で汗を流すことは最高の国際貢献です。
「協力隊は日本の宝」この旗を高く掲げてこれからも振り続けたいと思います。

茨城県青年海外協力隊を育てる会
JICAボランティア支援者の皆様、隊員のご家族によって組織されている会で、茨城県出身のボランティアに多大なご支援･ご協力をいただいています。また、開発教育や国際理解教育を積極的に県民運動として推進しています。

世界に笑顔を、茨城の未来を広げよう。

蛯原　園恵
平成24年度1次隊
派遣国：ソロモン諸島
職　種：作業療法士

清水　康登
平成24年度2次隊
派遣国：エクアドル共和国
職　種：自動車整備

花ヶ﨑　和希
平成24年度3次隊
派遣国：モルティブ共和国
職　種：体育

石橋　洋二
平成24年度3次隊
（シニア海外ボランティア）
派遣国：エルサルバドル共和国
職　種：工作機械

前田　浩徳
平成24年度3次隊
派遣国：ウガンダ共和国
職　種：理数科教師

福元　エリ子
平成25年度1次隊
派遣国：エチオピア連邦民主共和国
職　種：小学校教諭

小坂　啓司
平成25年度1次隊
派遣国：エチオピア連邦民主共和国
職　種：経済市場調査

守永　大策
平成25年度2次隊
（シニア海外ボランティア）
派遣国：ヨルダン･ハシェミット王国
職　種：経営管理

青年海外協力隊茨城県OV会
会 長　**大橋　暁**
平成2年度3次隊
水戸市在住
派遣国：モロッコ／職 種：測 量

我々、多くの青年海外協力隊OVは、全く違う派遣国、職種、年齢、性別、経験にもかかわらず、初めて会った同士でも協力隊経験者というだけで、意思の疎通が簡単に出来るという不思議な体験をしています。
それは一概に仲間意識というよりも、それぞれが文化や習慣、宗教も日本とは全く異なる任地で、現地の人達と一緒に、同じように生活してきたことで自然に身についたコミュニケーション能力のおかげであるといえるでしょう。
青年海外協力隊というと途上国の人に自分の持っている技術を伝えるというイメージがありますが、実際はそれだけでなく、日本に居ては出来ない貴重な体験をすることで視野が広がり、コミュニケーション能力や思い通りに行かない事態を自分で解決させる能力、忍耐力等を磨き、一皮も二皮も剥けて、これ以上にない自分のツールを身に付け、帰国してきます。
あなたの笑顔で世界を、日本を、そして、茨城を元気にしてみませんか？
青年海外協力隊茨城県OV会はそんなあなたを応援致します。

青年海外協力隊茨城県OV会
茨城県在住･出身のJICAボランティア経験者で組織されている会で、茨城県出身のボランティアに多大なご支援･ご協力をいただいています。また、JICAボランティアの経験を活かし、災害ボランティアや地域貢献活動、国際理解教育や応募希望者への応募相談などを行っています。

世界に広がる青年海外協力隊
茨城県出身JICAボランティア派遣実績

昭和41年（1966年）～平成28年（2016年）10月31日現在の派遣累積数（　）内は女性の数

青年海外協力隊 …… 836名（362名）　日系社会青年ボランティア … 20名（10名）
シニア海外ボランティア …… 166名（22名）　日系社会シニアボランティア … 8名（5名）

累　計
1,030名
（399名）
86ヶ国

アジア

国　名	派遣中	帰　国	累　計
インドネシア	0（0）	13（5）	13（5）
マレーシア	1（1）	21（8）	22（9）
フィリピン	0（0）	23（8）	23（8）
タイ	1（1）	27（10）	28（11）
カンボジア	1（1）	22（7）	23（8）
ラオス	2（2）	12（5）	14（7）
東ティモール	1（1）	2（0）	3（1）
ベトナム	1（1）	12（4）	13（5）
ミャンマー	0（0）	1（0）	1（0）
中華人民共和国	0（0）	17（6）	17（6）
モンゴル	3（3）	11（7）	14（10）
ブータン	0（0）	9（3）	9（3）
バングラデシュ	0（0）	22（6）	22（6）
インド	0（0）	5（2）	5（2）
モルディブ	1（0）	8（1）	9（1）
ネパール	1（0）	20（7）	21（7）
パキスタン	0（0）	4（2）	4（2）
スリランカ	2（1）	11（4）	13（5）
キルギス	0（0）	3（3）	3（3）
ウズベキスタン	1（1）	6（4）	7（5）
人　数	15（12）	249（92）	264（104）
国　数	11（9）	20（18）	20（19）

アフリカ

国　名	派遣中	帰　国	累　計
スーダン	0（0）	4（1）	4（1）
ボツワナ	1（0）	9（3）	10（3）
エチオピア	1（0）	18（5）	19（5）
ガーナ	0（0）	33（8）	33（8）
ケニア	1（0）	34（16）	35（16）
リベリア	0（0）	4（1）	4（1）
マラウイ	3（3）	40（18）	43（21）
ナミビア	0（0）	3（1）	3（1）
南アフリカ共和国	0（0）	1（0）	1（0）
ウガンダ	5（1）	16（3）	21（4）
タンザニア	1（0）	23（8）	24（8）
ザンビア	2（1）	34（7）	36（8）
ジンバブエ	0（0）	11（6）	11（6）
ベナン	0（0）	3（3）	3（3）
ブルキナファソ	0（0）	10（7）	10（7）
カメルーン	0（0）	1（1）	1（1）
コートジボワール	0（0）	3（2）	3（2）
ジブチ	0（0）	1（0）	1（0）
ガボン	0（0）	1（0）	1（0）
マダガスカル	0（0）	2（2）	2（2）
モザンビーク	3（1）	0（0）	3（1）
ニジェール	0（0）	15（10）	15（10）
ルワンダ	2（1）	4（1）	6（2）
セネガル	0（0）	21（12）	21（12）
人　数	19（7）	291（115）	310（122）
国　数	9（5）	23（20）	24（21）

北米中南米

国　名	派遣中	帰　国	累　計
ベリーズ	0（0）	2（2）	2（2）
コスタリカ	1（1）	17（9）	18（10）
ドミニカ	0（0）	1（1）	1（1）
ドミニカ共和国	2（0）	19（6）	21（6）
エルサルバドル	1（1）	11（1）	12（2）
グアテマラ	2（1）	13（7）	15（8）
ホンジュラス	0（0）	36（18）	36（18）
ジャマイカ	1（1）	8（1）	9（2）
メキシコ	0（0）	9（3）	9（3）
ニカラグア	0（0）	15（6）	15（6）
パナマ	0（0）	12（5）	12（5）
セントルシア	0（0）	2（1）	2（1）
アルゼンチン	2（0）	13（2）	15（2）
ボリビア	1（1）	22（10）	23（11）
ブラジル	3（1）	13（7）	16（8）
チ リ	1（0）	8（4）	9（4）
コロンビア	0（0）	7（2）	7（2）
エクアドル	1（0）	11（5）	12（5）
パラグアイ	1（1）	32（18）	33（19）
ペルー	3（1）	5（1）	8（2）
ウルグアイ	0（0）	6（1）	6（1）
ベネズエラ	0（0）	3（0）	3（0）
人　数	19（8）	265（110）	284（118）
国　数	12（8）	22（21）	22（21）

中東

国　名	派遣中	帰　国	累　計
ヨルダン	0（0）	17（7）	17（7）
シリア	0（0）	11（2）	11（2）
イエメン	0（0）	2（1）	2（1）
エジプト	1（1）	8（4）	9（5）
モロッコ	1（0）	15（6）	16（6）
チュニジア	0（0）	15（6）	15（6）
人　数	2（1）	68（26）	70（27）
国　数	2（1）	6（6）	6（6）

欧州

国　名	派遣中	帰　国	累　計
ブルガリア	0（0）	4（3）	4（3）
ルーマニア	0（0）	2（1）	2（1）
ハンガリー	0（0）	4（1）	4（1）
ポーランド	0（0）	3（2）	3（2）
人　数	0（0）	13（7）	13（7）
国　数	0（0）	4（4）	4（4）

大洋州

国　名	派遣中	帰　国	累　計
フィジー	1（0）	11（2）	12（2）
キリバス	0（0）	4（1）	4（1）
マーシャル	0（0）	8（2）	8（2）
ミクロネシア	1（0）	5（2）	6（2）
パプアニューギニア	0（0）	23（0）	23（0）
ソロモン	1（1）	3（2）	4（3）
トンガ	0（0）	6（4）	6（4）
バヌアツ	1（1）	11（4）	12（5）
サモア	0（0）	11（1）	11（1）
パラオ	0（0）	3（1）	3（1）
人　数	4（2）	85（19）	89（21）
国　数	4（2）	10（9）	10（9）

JICA TSUKUBA INFORMATION

昭和55年（1980年）に、筑波研究学園都市の南部に筑波インターナショナルセンターが、また、昭和56年（1981年）に筑波国際農業研修センター（茨城県内原町より移転）がJICAの国内機関として設立されました。
さらに、平成8年（1996年）に、筑波インターナショナルセンターと筑波国際農業研修センターが発展的に統合し、筑波国際センター（通称JICA筑波）が発足し、今日に至っています。
JICA筑波は、農業関連の実習・実験施設、圃場を始め、講義室等の研修施設と195名収容の宿泊施設を有し、独自の研修施設を活用した農業分野のほか、筑波研究学園都市内の研究機関等の協力を得て、開発途上国の人材育成を目的にした研修を主要業務としています。
「環境共生」、「最先端科学技術」といった地域特性を活かし、開発途上国の多様なニーズに対応した研修に数多く取組んでおり、年間約120カ国から1,000名以上の研修員を受け入れています。
また、茨城県、県内各市町村、大学、地元の様々な団体と連携を図りながら、地域に根ざした活動（市民参加協力事業）にも力を入れています。
JICA筑波は、こうした活動を通じて開発途上国との架け橋として、また、茨城県にJICAの拠点として活動しています。

JICA筑波（JICA筑波は、栃木県と茨城県を所管しています）
〒305-0074 茨城県つくば市高野台3-6
TEL.029-838-1111（代表）　FAX.029-838-1119
独立行政法人 国際協力機構 筑波国際センター